

小松さんの投稿に考えることがあります。

「地域組織で考える防災」というテーマについての重要性は誰もが異存はないでしょう。

「できる人が、できる時に、できることをすればよい。・・・地域内でいかに醸成していくことが何よりも大切・・・」これもまったくそのとおりであります。小松さんの取組みも立派であります。

しかし、小松さんが指摘する社会環境において、本当に、「できる人がすればよい。」で満足するのでしょうか。 私から言わせると、そこで終わっているのは、このような新聞紙上で立派な言葉を並べた割には、有体に申すが浅薄さを感じます。このような生活密着型テーマは美名・綺麗言で済むことではありません。

「できる人がすればよい。」ということを強調すれば、先細りが眼に見えて来るだけです。世の中は、総てのもの・ことに対して賛否が生まれますが、“俺はあなたの主張は無意味だ、先ずは自分の命は自分で守れ、他人を助けるのはそれからだ、その次だと言うではないか、吾が命あつての物種”と言う人が多数ではありませんか。

あるいは、やりたくとも体が不自由等と仮病を使う人、仕事柄都合が付かなく出来ないという人に対しては何と呼び掛けるのか、何を以って、どんな殺し文句で啓蒙・啓発をするのでしょうか。社会情勢を並べて他者転嫁するが如くの姿勢ではなく、人間の心理根底にあるこれらの疑問や問題点に正面から向き合ってその解答きちんとここで表明すべきであります。私は理想と現実のギャップを指摘するよりは、小松さんが提起するテーマについては、まずは語る側の姿勢として、本音と建前、総論と各論を使い分けるリーダー資質を鋭く指摘したい。そんな使い分けは人間みんなに備わった天性です。しかし、リーダーの任に就いた者は、そんなずる賢い使い分けを超越して「無極而太極也」に帰着し、多くの人の率先垂範、自発的賛同と改心を促す「知行合一」の実践に即した実学（実業と学問）を述べてください。

もう一つの切り口ですが、「できる人がする。」と、その人達の活躍・成果を率直に高評価出来ない、共に喜べない、それどころか、「梯子を外す」「足を引っ張る」というひがみ・ねたみ・しょねみからのマンキタゲ佞奸根性が裏で画策するのが世の常ですが、これらにはどうに対応すべきですか。そういうブレーキ屋を排除する手立てを明示して貰いたいものです。

2025年（令和7年）11月14日（金曜日） 山形新聞

地域組織で考える防災

提言

地域の運営には地区役員（自主防災会役員、地区福祉役員を兼ねる）や民生委員、児童委員、火災予防委員、生産者林組合、公民館運営委員など多くの役割があり、それぞれが大切な活動をおこなっています。

しかし、多くの地域で近年の急激な少子高齢化の影響が出てきているのではないのでしょうか。地域を支えるさまざまな組織・団体のなり手が限られ、その運営・維持が困難な現状にあると推察します。

私が区長を務める南陽市小岩沢地区は17世帯、人口274人、隣組数23組（65歳以上が50%超、このうち75歳以上が30%超）であり、超高齢化が進んでいる小さな地区です。

ある隣組では、住民の年齢が全て80歳を超える単身世帯ばかりといったところもあり、支障が出ています。

そんな中ですが、地域防災への取り組みはますます重要になっていくと懸念します。小岩沢地区ではこれまで大きな災害がなかったこともあり、住民の防災意識が薄く、有事の際の対応の準備、取り組みが行われてきませんでした。

しかし、能登半島地震や庄内、最上を中心とした豪雨災害などの発生は、人ごとではありません。高齢化が進む南陽市小岩沢地区として、どのようなか？地区役員が取るべき行動とは？いつ・誰が・地域の公民館は収容規模に課何を？の4つの防災情報があります。そこで地区内

「できる人が できる時に できることをすればよい」。

自助に加え、若者と高齢者が世代混合で支え合う共助・互助の精神を地域内でいかに醸成していくことが何よりも大切であると思います。

気張らず知恵出し合う ■ 多世代で共助・互助へ